

## 【報告】

## 発達気になる子どもをもつ親の育児ストレス

橋本 かほる<sup>\*1</sup>, 竹内 恵子<sup>\*2</sup>, 名村 晶代<sup>\*3</sup>, 石塚 佳代<sup>\*3</sup>  
堀田 佳代子<sup>\*3</sup>, 武田 眞由美<sup>\*3</sup>, 津田 明美<sup>\*4</sup>  
<sup>\*1</sup>京都先端科学大学 健康医療学部, <sup>\*2</sup>福井大学 教育学部  
<sup>\*3</sup>福井市福祉保健部 子育て支援課, <sup>\*4</sup>福井県こども療育センター

## Scale for Childcare Stressors of Parents with “Children of Concern”

Kahoru HASHIMOTO<sup>\*1</sup>, Keiko TAKEUCHI<sup>\*2</sup>, Akiyo NAMURA<sup>\*3</sup>, Kayo ISHIZUKA<sup>\*3</sup>  
Kayoko HORITA<sup>\*3</sup>, Mayumi TAKEDA<sup>\*3</sup>, Akemi TSUDA<sup>\*4</sup>

<sup>\*1</sup>Department of Speech and Hearing Sciences and Disorders, Kyoto University of Advanced Science

<sup>\*2</sup>Faculty of Education, University of Fukui

<sup>\*3</sup>Child Rearing Support Division, Welfare and Health Department, Fukui City

<sup>\*4</sup>Fukui Prefectural Rehabilitation Center for Children with Disabilities

## 要 旨

発達気になる子どもをもつ親の育児ストレスについて日本版PSIを用い、親のストレス状況を調査し、親自身の状況や子どもの発達プロフィールから検討を行った。育児ストレスが高値であった親は全体の18%で、ストレス総点やストレス側面の偏りから今後専門家の介入も視野に入れた育児支援の必要性が示唆された。また、「退院後の気持ち」に高いストレスがある親の80%に妊娠中・出産時から退院までの経過で何らかの記載があることがわかった。子どもに関する下位尺度の項目数が親に関するものより多かったものは82%であった。「子どもの機嫌の悪さ」については63%の親が高いストレスを示し、その内容として目覚めの悪さや拒否反応が強いという子どもの行動特徴が示された。今後、育児ストレスをふまえた親支援に向けてデータの蓄積と保育士の親理解と対応という側面からの検証が必要である。

キーワード：発達気になる子ども、育児ストレス、PSI、親子療育教室

Key words: children of concern, scale for childcare stressors of parents,

PSI: Parenting Stress Index, a nursery school implementing parents-children class

## I 研究背景

保育所入所の低年齢化が進むなか、こだわりが強い、コミュニケーションが苦手、集団行動が苦手など発達気になる子どもの数が増えている<sup>1,2)</sup>。福井県子ども家庭課が2012年に実施した「保育所における気になる子の現状に関する調査」<sup>3)</sup>において、発達気になる子どもとは、障害児保育・ふれあい

保育推進事業の対象とならないが、保育上支援を必要とされる子どもとしている。福井市子育て支援課では、福井市内の全保育所・幼稚園に在籍する子どものうち発達気になる子どもの数は、2012年度8.5%、2014年度には11.9%と全体の1割をしめ、保育上支援を必要とする子どもの数は年々増加傾向にあるとしている<sup>4)</sup>。

発達障害は自閉症スペクトラム障害 (autism

spectrum disorder:ASD), 注意欠如多動性障害 (attention deficit/hyper-activity disorder:ADHD), 学習障害 (learning disabilities/disorders) の総称としてわが国で用いられている障害名<sup>5)</sup>である。発達障害児の幼児期の特徴として, ことばの遅れによるコミュニケーションの未熟さ, こだわりや多動による集団行動のとりづらさなどの症状が挙げられる。発達障害児の場合, 育てにくい, 懸命に養育をしてもうまくいかない, と感じる養育者も多い<sup>6)</sup>。

親のストレス研究では, 浅野ら (2011)<sup>7)</sup> は自閉症スペクトラム障害と診断された子どもをもつ母親のストレス研究を, 大島ら (2018)<sup>8)</sup> は難聴と診断された子どもをもつ母親のストレスについて報告しているが, 発達が気になるが専門機関への相談に至らない未診断の子どもをもつ親のストレスについてはこれまで報告はない。

## II 研究目的

子どもの発達が気になる保護者は, どこに相談すればよいのか, また相談先を見つけても受診までの待ち期間中, 不安を抱えながら日々の生活を送っている。一方で, 保育園などの集団で, 発達の気になる子どもを早期にスクリーニングし, 保護者と保育士が情報を共有し家庭と連携した保育ができれば, 子どもにとっても保護者にとっても早い段階から必要な支援につながりやすい。

療育の対象となる発達の気になる子どもについての発達のアセスメントには, 行動観察, 発達検査などを用い, 包括的な評価が可能である。一方で, 親の内面へのアセスメントは現場の保育士にとって課題とされており, 具体的な保護者支援につながりにくい。つまり, 親自身が家庭や職場でどのような悩みをもちながら育児をしているかがわからずして, 気になる子どもの発達について保育士と親との共通理解は困難である。

そこで, 今回の研究では, 親の内面的なストレス状況を調査し, 育児ストレスが高い親について, 親の育児環境や就労状況, 親が気になる子どもの発達特徴からその背景を考察した。

なお, 本論文での「発達の気になる子ども」とは, 福井県子ども家庭課の定義「中軽度障害もしくは重度障害児以外の児童であって, 発達障害や知的障害などの疑いまたは環境や育て方に問題があると思われる児童で, 特別な配慮が必要であると保育士等が判断する児童」<sup>3)</sup>を用いた。「気になる行動」とは「集団行動がとりにくい」「切り替えが悪い」「社会性の理解が乏しい」「言語の理解が乏しい」「発音が不明瞭」「視線が合わない」「運動発達が遅い」「多動で

ある」など17項目があげられている<sup>3)</sup>。

## III 方法

### 1. 対象

福井市では2009年度から, 公立保育園で発達の気になる子どもを対象に親子参加型の療育教室 (親子療育教室) を実施し, その効果を報告している<sup>9-11)</sup>。市町の保健センターなどで実施されている1歳6ヵ月乳幼児健康診査や3歳児健康診査後に, 発達の気になる子どものフォローアップ教室や専門機関での療育は既に実施されているが, 地域の公立保育園に在籍する発達の気になる未診断の子どもへの療育教室を通しての取り組みは, 福井市の他に報告はない。

対象はX年~X+1年に親子療育教室 (教室) に参加した保護者11名 (母親10名, 父親1名) である。教室の参加者は保育園園長が毎年4月に保護者あてのお便りで募集している。このうち, すべての調査項目に回答が得られた母親10名を対象とした。

### 2. 倫理的配慮

本研究は京都先端科学大学の研究倫理審査委員会の承認 (正式審査20-9) を受けた。研究の実施にあたっては, 研究の意義, 目的と内容 (調査方法), データの扱いなどについて, 対象者に説明文書と口頭で説明を行った。研究への参加決定は対象者の自由意思であり, 参加の同意をしても研究実施中いつでも撤回できることを説明した。

### 3. 方法と実施手順

対象者 (以下, 親) と対象者の児 (以下, 子ども) の基本情報については, 教室で用いられている「育ちの支援計画シート」より抽出した。親の属性については, 年齢, 就労状況, 子どもの人数, 家族構成, 育児支援者, 妊娠中・出産時から退院までの経過とした。子どもの属性については, 年齢, 性別, 出生順位, きょうだいの有無, 発達歴, 基礎疾患, 親が気になる発達領域とした。

子どもの発達評価としてKIDS乳幼児発達スケール<sup>12)</sup>を用いた。KIDS乳幼児発達スケールは教室開始時に子どもの発達のアセスメントとして用いている発達検査である。0歳1ヵ月から6歳11ヵ月を対象とし, 運動, 操作, 理解言語, 表出言語, 概念, 対成人社会性, 対子ども社会性, しつけ, 食事の9領域について養育者などが記入した結果をもとに, 発達プロフィールと領域別の発達年齢 (DA), 総合発達年齢 (DQ), 総合発達指数 (DQ) から, 発達の特徴を明らかにできる。

親の育児ストレスについては, 教室に参加している発達の気になる子どもの親に, PSI育児ストレスインデックス (日本版 Parenting Stress Index :

PSI)<sup>13)</sup>を教室開催期間中に実施した。PSIはAbidinによって、機能不全を起こしている育児の状況への決定要因に関する理論モデルから構成されている。日本版は兼松らによって2006年に原版PSIを元に、日本の親の育児ストレスを測定する尺度として再開発された。PSIは3ヵ月から12歳までの年齢の子をもつ親あるいは親代行者による自己評価法である。子どもの特徴に関するストレス(7下位尺度, 38項目)と親自身に関するストレス(8下位尺度, 40項目)の計78項目から構成され、「まったくそのとおり」から「まったく違う」の5段階のリッカートスケールを用いて回答する<sup>13)</sup>。

PSIの解釈にはパーセンタイルスコアを使用する。標準サンプルの度数分布から得ているスコアの標準範囲は15%から80%であり、85%以上が高いスコアである<sup>13)</sup>。ストレス総点が260かそれ以上のスコアであった場合、専門家のコンサルテーションを受けるように提案すべき<sup>13)</sup>。としている。[子どもの側面]とその多様な下位尺度は、子どものその時点での心理的適応のレベルを予測することができ、下位尺度のパターンは、正確な問題行動のタイプが示唆される。[親の側面]での高値は、ストレスの原因や親子システムの潜在的な機能不全が、親機能に関連しているということを示している<sup>13)</sup>。

PSIより総点、子どもの側面に関するストレス(以下、子どもに関するストレス)、親の側面に関するストレス(以下、親に関するストレス)についてそれぞれの平均値とストレスが85%以上の高値を示した親の人数について調査した。次に個々の親について、ストレス総点ならびに子どもの側面の下位尺度、親の側面の下位尺度のうちストレスが高値の項目について抽出した。さらに、子どもの側面と親の側面

との関係についてピアソンの相関係数を求めた。分析にはSPSSVer.27を用いた。

## IV 結 果

### 1. 対象者(親)の属性

対象者(親)10名の平均年齢は35.1(30~40)歳、全員が有職者であった。子どもの人数は2名から5名で中央値は2名であった。家族構成は核家族5名、拡大家族5名であった。育児支援者は有り7名、なし3名であった。妊娠中・出産時から退院までの経過について6名の親に何らかの記載があった(表1)。

### 2. 対象者の子どもの属性

子ども11名のうち2名は双胎児である。子どもの平均年齢は46.5ヵ月(35~52ヵ月)、男児9名、女児2名であった。出生順位は第1子が5名、第2子が3名、第3子が2名、第5子が1名で、全てにきょうだいがあった。KIDS乳幼児発達スケールの総合発達指数の平均は87(65~111)(±13.7)であった(表2)。

表1. 対象者の属性

対象者(親)	子どもの人数	家族構成	育児支援者	妊娠中・出産時から退院までの特記
親A	4	核家族	なし	有り(切迫早産等)
親B	3	拡大家族	有り	特になし
親C	5	核家族	なし	有り(帝王切開等)
親D	2	拡大家族	有り	特になし
親E	2	核家族	有り	有り(帝王切開等)
親F	2	核家族	なし	特になし
親G	2	拡大家族	有り	有り(帝王切開等)
親H	2	核家族	有り	有り(帝王切開等)
親I	2	拡大家族	有り	特になし
親J	3	拡大家族	有り	有り(切迫早産等)

表2. 対象者の児の属性

対象者の児	年齢	性別	出生順位	きょうだいの有無	発達歴	基礎疾患	KIDS(総合発達指数)	親が気になる発達領域
子A	48	男	第3子	有り	ことばの遅れ	なし	80	言語面、行動面
子B	52	男	第1子	有り	ことばの遅れ	なし	84	言語面、行動面
子C	49	男	第5子	有り	運動発達の遅れ ことばの遅れ	なし	65	言語面、行動面 社会性
子D	50	男	第1子	有り	なし	なし	111	言語面、行動面
子E	52	男	第1子	有り	運動発達の遅れ ことばの遅れ	なし	93	行動面
子F	54	男	第1子	有り	ことばの遅れ	なし	82	言語面、行動面
子G	44	女	第2子	有り	ことばの遅れ	なし	97	言語面、運動面
子H	41	女	第1子	有り	なし	なし	81	行動面
子I	35	男	第2子	有り	なし	なし	75	言語面
子J	40	男	第2子	有り	運動発達の遅れ	なし	105	運動面、行動面
子K	40	男	第3子	有り	運動発達の遅れ	なし	105	運動面

※子Jと子Kは双胎児

### 3. PSIの結果

親10名にPSIを実施し、子ども11名（内2名は双胎児）についての結果を得た。

#### (1) ストレス値

PSI総点の平均値は182.4（±34.2）で育児ストレスが85%以上の高値であった親は11名中2名で全体の18%であった。子どもに関するストレスの平均値は92.2（±12.2）で、ストレスが高値であった親は11名中1名で全体の9%であった。親に関するストレスの平均値は100.3（±25.1）で、ストレスが高値であった親は11名中2名で全体の18%であった。2名のうち1名については子どもに関するストレスについても高値であった（表3）。

#### (2) ストレス下位尺度

子どもに関するストレス7下位尺度のうち、6尺度に高値のストレスを持つ親がいた。このうち、「C2子どもの機嫌の悪さ」については11名中7名、63%の親が高いストレスを示した。また、「C3子どもが期待どおりにいかない」「C5親につきまとう／人に慣れにくい」については11名中4名、36%の親が

高いストレスを示した。一方で「C1親を喜ばせる反応は少ない」については高いストレスを示す親はいなかった（表3, 4）。

親に関するストレスでは、8下位尺度すべてにおいて高いストレスを持つ親がいた。このうち、「P6退院後の気持ち」については11名中5名、45%の親が高いストレスを示した。一方で「P3夫との関係」「P4親としての有能さ」については、高いストレスを示したものは1名のみであった。（表3, 4）

個々の親について、ストレスが高値の下位尺度を表4に示した。親Cのストレス総点は278で、子どもに関するストレスでは6つの下位尺度、親に関するストレスでは7つの下位尺度に高いストレスがあった。親Hについてはストレス総点が234で、子どもに関するストレスでは2つの下位尺度、親に関するストレスでは6つの下位尺度に高いストレスがあった（表4）。

子どもに関する下位尺度の項目数が親に関するものより多かった親は11名中8名あり、全体の82%であった（表4）。

表3. 各側面の総点、各下位尺度点数の平均値とストレスが85%以上であった人数（N=11）

子どもの側面	平均値	人数	親の側面	平均値	人数
子どもの側面総点	92.2	1	親の側面総点	100.3	2
下位尺度			下位尺度		
C1 親を喜ばせる反応が少ない	11.2	0	P1 親役割によって生じる規制	19.5	2
C2 子どもの機嫌の悪さ	21.5	7	P2 社会的孤立	15.3	2
C3 子どもが期待どおりにいかない	12.4	4	P3 夫との関係	12.1	1
C4 子どもの気が散りやすい／多動	14.6	2	P4 親としての有能さ	19.0	1
C5 親につきまとう／人に慣れにくい	12.3	4	P5 抑うつ・罪悪感	10.2	2
C6 子どもに問題を感じる	10.1	3	P6 退院後の気持ち	8.6	5
C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい	9.8	2	P7 子どもに愛着を感じにくい	7.2	2
			P8 親の健康状態	8.2	4

表4. 対象者別のストレス総点、各側面のストレス値と85%以上の下位尺度

対象者（母）	ストレス総点	子どもの側面		親の側面	
		ストレス値（%）	下位尺度	ストレス値（%）	下位尺度
親A	172	75	C3, C4	1	なし
親B	206	80	C2, C3	55	P7
親C	278	99	C2, C3, C4, C5, C6, C7	99	P1, P2, P4, P5, P6, P7, P8
親D	170	50	C7	10	P7
親E	158	40	C2	5	なし
親F	170	20	なし	30	P6, P8
親G	159	40	C2	5	なし
親H	234	65	C2, C5	95	P1, P2, P3, P5, P6, P8
親I	186	70	C3, C6	25	P8
親J	189	50	C2, C5	40	P6
親K	189	50	C2, C5	40	P6

※親Jと親Kは同じ

(3) 子どもの側面と親の側面についての関係

子どもの側面の下位尺度と親の側面の下位尺度の関係について、強い正の相関があった尺度は「C5親につきまとう／人に慣れにくい」と「P4親としての有能さ」、「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」と「P4親としての有能さ」「P1親役割によって生じる規制」であった。正の相関があった尺度は「C1親を喜ばせる反応が少ない」と「P7子どもに愛着を感じにくい」、「C2子どもの機嫌の悪さ」は「P3夫との関係」「退院後の気持ち」、「C4子どもの気が散りやすい／多動」と「P5抑うつ・罪悪感」、「C5親につきまとう／人に慣れにくい」と「P1親役割によって生じる規制」「P2社会的孤立」「P6退院後の気持ち」、「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」と「P6退院後の気持ち」「P7子どもに愛着を感じない」「P2社会的孤立」であった。「C1親を喜ばせる反応が少ない」と「P1親役割によって生じる規制」については負の相関があった(表5-1)。

親の側面の下位尺度からみた子どもの側面の下位尺度の関係では、強い正の相関があった尺度は「P1親役割によって生じる規制」と「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」、「P4親としての有能さ」と「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」「C5親につきまとう／人に慣れにくい」であった。正の相関があった尺度は「P1親役割によって生じる規制」と「C5親につきまとう／人に慣れにくい」「C1親を喜ばせる反応が少ない」、「P2社会的孤立」と「C5親につきまとう／人に慣れにくい」「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」、「P3夫との関係」と「C2子どもの機嫌の悪さ」、「P5抑うつ・罪悪感」と「C4子どもの気が散りやすい／多動」、「P6退院後の気持ち」と「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」「C2子どもの機嫌の悪さ」「C5親につきまとう／人に慣れにくい」、「P7子どもに愛着を感じにくい」と「C1親を喜ばせる反応が少ない」「C7刺激に敏感／ものに慣れにくい」であった(表5-2)。

表 5-1. 子どもの側面の下位尺度と親の側面の下位尺度の関係

子どもの側面の下位尺度	親の側面の下位尺度
C1 親を喜ばせる反応が少ない	P7 子どもに愛着を感じにくい (r=0.45) P1 親役割によって生じる規制 (r=-0.41)
C2 子どもの機嫌の悪さ	P3 夫との関係 (r=0.48) P6 退院後の気持ち (r=0.45)
C3 子どもが期待どおりにいかない	なし
C4 子どもの気が散りやすい／多動	P5 抑うつ・罪悪感 (r=0.43)
C5 親につきまとう／人に慣れにくい	P4 親としての有能さ (r=0.71) P1 親役割によって生じる規制 (r=0.63) P2 社会的孤立 (r=0.58) P6 退院後の気持ち (r=0.40)
C6 子どもに問題を感じる	なし
C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい	P4 親としての有能さ (r=0.76) P1 親役割によって生じる規制 (r=0.73) P6 退院後の気持ち (r=0.46) P7 子どもに愛着を感じない (r=0.45) P2 社会的孤立 (r=0.43)

表 5-2. 親の側面の下位尺度と子どもの側面の下位尺度の関係

親の側面の下位尺度	子どもの側面の下位尺度
P1 親役割によって生じる規制	C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい (r=0.73) C5 親につきまとう／人に慣れにくい (r=0.63) C1 親を喜ばせる反応が少ない (r=-0.41)
P2 社会的孤立	C5 親につきまとう／人に慣れにくい (r=0.58) C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい (r=0.43)
P3 夫との関係	C2 子どもの機嫌の悪さ (r=0.48)
P4 親としての有能さ	C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい (r=0.76) C5 親につきまとう／人に慣れにくい (r=0.71)
P5 抑うつ・罪悪感	C4 子どもの気が散りやすい／多動 (r=0.43)
P6 退院後の気持ち	C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい (r=0.46) C2 子どもの機嫌の悪さ (r=0.45) C5 親につきまとう／人に慣れにくい (r=0.40)
P7 子どもに愛着を感じにくい	C1 親を喜ばせる反応が少ない (r=0.45) C7 刺激に敏感／ものに慣れにくい (r=0.45)

## V 考 察

本研究は、公立保育園で実施している親子療育教室に参加した発達が気になるが専門機関への相談に至らない未診断の子どもをもつ親の育児ストレスについての調査である。対象となった親のうち2名に高い育児ストレスがあることがわかった。対象となった親は全員有職者で、専業主婦はいなかった。

### 1. 有職者の母親の育児ストレスについて

母親の就労状況と育児ストレスとの関係について、白畑ら<sup>14)</sup>は健康な乳幼児の母親の育児ストレスについてPSIを用いた調査から、職業をもつ母親と比較して専業主婦の方がストレスは高かったことを報告している。また、瀧ら<sup>15)</sup>は生後3～4ヶ月の乳児を持つ母親の属性と育児ストレスの実態について、PSIの調査より有職者の母親に比べ専業主婦の母親は「社会的孤立」や「親役割による規制を感じやすい」と報告している。

本研究の対象者は、発達の気になる子どもを持つ有職者の母親である。親の側面でのストレスが高かった親は2名あり、共通した下位尺度は「社会的孤立」「親役割による規制を感じやすい」「抑うつ・罪悪感」で瀧らの調査と一部重複していた。そのうち親Cについてはストレス総点が278で、親に関するストレス、子どもに関するストレスともに高値を示した。

親Cは核家族で近隣に支援者がいない状況の中、5人の子どもの育児をしている。子Cは第5子で発達指数は65と平均の範囲を下回っており、親は言語面、行動面、社会性の面で子どもの発達が気になっている。また、親Hについては総点234で親に関するストレスのみ高値であった。親Hは核家族で2人の子どもの育児をしているが、父親は単身赴任で母方の祖母に育児支援を得ている。子Hは第1子で発達指数は81、第2子は0歳児である。白畑<sup>15)</sup>はストレス総点が260以上のスコアを示している場合、またストレス総点は標準の範囲でありながら、側面のスコアが標準範囲より高い場合、専門家のサービスを受けるべきと考えられ、どちらの場合でも明確な理由が見当たらないときは専門家のサービスや支援が特に必要である、と報告している。対象の2名の親の育児ストレスが高い理由として、親がおかれた育児環境や子の発達状態が考えられた。

また、親の側面の下位尺度では11名中5名の親が「退院後の気持ち」に高いストレスを示した。この5名の親のうち4名が妊娠中・出産時から退院までの経過に何らかの記載事項があった。瀧ら<sup>15)</sup>は、生後3～4ヶ月の乳児をもつ母親の属性と育児ストレス

に関する研究より、既往歴・妊娠中の治療歴のある母親の退院後の気持ちの得点が、治療歴のない対照群に比べ高い結果であったと報告している。本研究では、子どもが3～4歳という年齢に達しているものの、妊娠中・出産時から退院までの経過が、親の育児ストレスとして長期的に継続することが考えられた。

### 2. 未診断の子どもの母親の育児ストレスについて

今回の対象児は発達が気になるが未診断の子どもである。これまでに診断名のある子どもを持つ親のストレス研究については、広瀬ら<sup>16)</sup>は脳性麻痺児をもつ親の育児ストレスが高いこと、浅野ら<sup>8)</sup>は自閉症スペクトラム障害と診断された児をもつ親のストレスは、子どもの特徴に関する1項目の平均得点は親自身に関わるストレスの平均点よりも高かったことを報告している。

本研究においても親自身に関わるストレスよりも子どもに関わるストレスの方が高い親は11名中8名あった。子どもに関する下位尺度では「子どもの機嫌の悪さ」に11名中7名の親が高いストレスを示していた。この7名の「子どもの機嫌の悪さ」の8下位項目のうち、半数以上の親が「そのとおり」「まったくそのとおり」と回答しているものは、「私の子どもは目覚める時にだいたい機嫌がわるい」「私の子どもは何かいやなことがあると、非常に強く反応する」「子どもがすることで、私を本当にイライラさせるようなことがある」であった。親が気になる子どもの発達特徴として8名の子どもに行動面があげられており、今回の調査で、目覚めの悪さや拒否反応が強いという具体的な行動特徴がわかった。

尺度間では、「刺激に敏感／ものに慣れにくい」「親につきまとう／人に慣れにくい」といった子どもの側面のストレス値が高いほど親は「親としての有能さ」「親役割によって生じる規制」に高いストレスを持っていることがあきらかになった。子どもの人やものへの変化への慣れにくさや親との分離の難しさ等が、家庭での母親の育児負担を大きくしているのではないかと考える。

### 3. 多胎の育児ストレスと父親のPSI結果について

対象者のうち双胎児(子J、子K)については母親(親J)のみならず、父親からもPSI調査の協力を得られた。教室には毎回両親で参加している。親Jは親に関するストレス、子どもに関するストレスともに高値ではなかった。子Jと子K、それぞれについてのストレスの下位尺度では、3つの下位尺度(C2子どもの機嫌の悪さ、C5親につきまとう／人に慣れにくい、P6退院後の気持ち)が高値であり、双胎児で一致していた。父親の育児ストレスでは、1つの

下位尺度（子KのC6：子どもに問題を感じる）のみ高値で、母親との重複した下位尺度項目はなかった。多胎の育児について古田<sup>17)</sup>は、健常児の双胎を持つ母親と単胎児を持つ母親にPSI-SF（PSIの簡易版）を用い、多胎児を持つ親は一人ひとりの子どもに対するストレスは高くはないが、「親の側面」のストレスが高いことを報告している。さらに3歳児群では双子間のストレスの差が「親の側面」のなかでも「子育ての不安」を強める因子となっており、双胎児の個性に違いがあると親が認識することは、当然で必要なことではあるが、一方で「子育ての不安」につながることも理解しておく必要があると述べている。子J、子Kについては、母親が高値を示した下位尺度は重複している一方で、気になる発達領域に違いがあること、父親のストレス高値であった下位尺度との違いがあることも、育児ストレスの背景として考慮が必要と考える。

#### 4. 早期療育の視点から

最後に早期療育の視点から考察する。大島ら<sup>8)</sup>は、難聴乳幼児17名に対して稲浪他のQRS（Questionnaire on Resources and Stress）簡易版を参考に作成した育児におけるストレスチェックシートを実施した結果、ストレスの内容については精神的苦悩、将来への不安が高い傾向がみられ、社会的孤立、家族和合の欠如の項目が顕著に低かったことについて、早期教育相談室や医療機関等での支援や相談、同じ難聴児を育てる母親との出会いによって社会的な孤立を感じることなく、支え合いが構築されてくるものと推測している。

福井市は2012年度より子どもが在籍する公立保育所における親子参加型の療育を継続して実践している。2012年からの5年間で87名の発達気になる子どもが参加し、参加児の年齢は2歳から3歳の幼児が全体の83.9%をしめている<sup>18)</sup>。われわれは、在籍保育園における親子療育教室の有用性について、2012年から2014年までの教室に参加した保護者へのアンケート調査を実施し、育児支援の視点からその有用性を報告している<sup>4)</sup>。この調査では、90%近くの親が教室参加をとおして家庭での遊びのレパートリーが増えたと回答しており、すべての親が子どもと一緒に遊ぶ楽しさや大切さが感じられたと回答している。さらに、教室参加をとおして育児や子どもの見方に変化や気づきがあったことを具体的に記載している。わが子の発達になんらかの気になることがある時期から、子どもにかかわる親と保育士が教室という場で子どもの情報を共有し、親は保育士の育児支援をうまく利用しながら子どもへのかかわり方を知り日々の育児において実践ができてい

さらに、福井市では同保育園で、教室終了後も就学までのフォローアップ教室を2015年から実施している。2015年からの5年間で31組の親子が参加している<sup>19)</sup>。発達気になる子どもをもつ親にたいして、子どもが在籍する園で未診断の時期から療育教室という場をとおして育児支援が継続して受けられることは、子どもに関するストレスや親自身の育児ストレスの軽減につながっているのではないかと考える。本研究は発達が気になるが教室に参加していない親の育児ストレスについての調査に至っていないため検討には限界がある。今後さらなるデータを蓄積した検討が必要である。

本研究より発達気になる子どもをもつ親の育児ストレス状況について一定の結果が得られた。今後、親への育児支援の状況調査と育児ストレスの緩和に向けた取り組みについて研究を継続していきたい。

利益相反自己申告：申告すべきものなし。

#### 謝 辞

本論文の作成にあたり、調査研究にご協力いただきました保護者の方々に深謝いたします。尚、本研究は文部科学省の補助金（若手研究）を受けて実施した（20K13941）。

#### 引用文献

- 1) 池田友美, 郷間英世, 川崎友絵他: 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66: 815-820, 2007.
- 2) 金井智恵子, 齋藤正典: 子どもの行動特性や母親の心理的な状態によりどのような子育て支援が求められるか- 幼児期の子どもを育てる母親の養育環境別の検討-. 小児保健研究, 73: 437-445, 2014.
- 3) 福井県子ども家庭課: 保育所における気になる子の現状に関する調査. 2012.
- 4) 福井市福祉保健部, 福井市立啓蒙保育園: 保育所における親子療育教室 中間報告書. 2014.
- 5) 発達障害者支援法 2004, 一部改正 2016. 12.
- 6) 山川紀子: 第2節医学的視点からみた気になる子ども. 第1章気になる子どもの早期発見・早期支援と「かわり指標」活用の意義. 安梅刺江編著: 気になる子どもの早期発見・早期支援「かわり指標」を活用した根拠に基づく子育て・子育て支援にむけて. 日本小児医事出版社: 8-11, 2009.
- 7) 浅野みどり, 古澤亜矢子, 大橋幸美他: 自閉症スペクトラム障害の幼児をもつ母親の育児ストレス, 子どもの行動特徴, 家族機能, QOLの現状とその関連. 家族看護学研究, 16 (3): 157-168, 2011.

- 8) 大島美絵, 小淵千絵: 難聴乳幼児を育てる母親の育児ストレスに関する検討. *Audiology Japan*, 61: 254-261, 2018.
- 9) 竹内恵子, 橋本かほる, 玉節子他: 在籍保育園における親子療育教室の有用性について—保護者アンケートおよび保育士インタビューから—. *福井大学教育地域科学部紀要*, 4: 269-286, 2014.
- 10) 竹内恵子, 武田眞由美, 橋本かほる他: 在籍保育園における親子療育教室の有用性-育児支援の立場から-. *福井大学初等研究*, 1: 11-18, 2016.
- 11) 竹内恵子, 武田眞由美, 橋本かほる他: 親子療育教室保育園としての園内研修-教員の共通理解と保育士の資質向上をめざして-. *福井大学初等研究*, 2: 1-8, 2017.
- 12) KIDS 乳幼児発達スケール 発達科学教育センター. 1989.
- 13) PSI育児ストレスインデックス手引き2訂版. 雇用問題研究会. 2015.
- 14) 白畑範子, 中村美保, 兼松百合子他: 健康な乳幼児の母親の育児ストレスの特徴と家族特性との関連. *日本看護科学会誌*, 16 (2): 246-247, 1996.
- 15) 滝愛美, 宮崎つた子: 生後3~4ヶ月の乳児をもつ母親の属性と育児ストレスに関する研究. *小児保健研究*, 77 (suppl): 219, 2018.
- 16) 広瀬たい子, 田中克枝: 脳性麻痺児の母子相互作用の検討—NCATSによる観察・測定から—. *小児保健研究*, 61 (2): 308-314, 2002.
- 17) 古田恵香: 7 双胎, 第3章日本版PSIを用いた育児ストレスを軽減する援助 (プログラム): PSI 育児ストレスインデックス手引き 2 訂版. 雇用問題研究会: 131-132, 2015.
- 18) 橋本かほる: Ⅲ. 参加児のまとめ. 福井市公立保育所における親子療育教室報告書 2012 年度~ 2018 年度~ 7 年間の親子療育教室担当保育士および教室参加児の状況~. 福井市福祉保健部子育て支援課, 福井市啓蒙保育園, 福井市西藤島保育園: 11-13, 2019.
- 19) 橋本かほる: 第3節 5年間のまとめ. 第1章OB会. 福井市公立保育所における親子療育教室終了後のフォローアップと移行支援-5年間 (2015 年度~ 2019 年度) の取り組み-. 福井市福祉保健部子育て支援課, 福井市啓蒙保育園: 25-27, 2020.